

「立山^{しんこう}信仰の里を守りたい」 立山・黒部アルペンルート^{くろべ}の開発者

佐伯^{さえき} 宗義^{むねよし}



ふるさと芦峯寺^{あしくらじ}のために

「明治^{めいじ}の初め頃^{はじ}まではなあ、ここ芦峯寺^{あしくらじ}は、霊山立山に登るために、全国から人が集まってにぎわう里だったんだがねえ」

立山の神に仕える古い家に生まれた佐伯宗義^{さえきむねよし}さんは、祖母^{そぼ}が昔の様子を話してくれるのを、熱心^{ねっしん}に聞いて育ちました。江戸時代、芦峯寺^{あしくらじ}は、極楽浄土^{ごくらくじょうと}を願い、全国から何千という人々が集まってくる、信仰の土地でした。

ところが、明治時代になって、神仏分離令^{しんぶつぶんりれい}が出るなど、世の中のしくみや価値観が大きく変わり、芦峯寺^{あしくらじ}は、さみしい山里に変わってしまったのです。「今じゃ、山仕事ぐらいしか、仕事^{しごと}がなくなってしまうた。こんなことじゃ、今後、どうして暮らしていけようか」

宗義少年は考えました。



今こそ、立山へのルートを整備^{せいび}するときだ！昔から、霊山立山を守ってきたのは芦峯寺^{あしくらじ}の人々だ。

この仕事こそ、芦峯寺に生まれた自分がぜひとも、やらなければならない仕事だ。

毎年、立山黒部アルペンルートには、全国各地から百万人を超す観光客が訪れているよ。

その立山黒部アルペンルートをつくったのが、佐伯宗義さんだよ。

すばらしい大自然を気軽に楽しめるのは、アルペンルートのおかげですね。



西暦	年齢	
1894年		新川郡立山村（現在の立山町）に生まれる
1930年	36歳	「富山電気鉄道株式会社」をおこす
1943年	49歳	「富山地方鉄道株式会社」をおこす
1952年	58歳	「立山開発鉄道株式会社」をおこし、立山の開発に取り組む
1964年	70歳	「立山黒部貫光株式会社」をおこす
1967年	73歳	室堂トンネルが貫通する
1969年	75歳	黒部ケーブルカーが開通し、立山トンネルも貫通する
1971年	77歳	構想から20年の歳月をかけて「立山黒部アルペンルート」が全線開通する
1981年	87歳	亡くなる

佐伯宗義さんの三十二年表



立山信仰の里として、芦峯寺が栄えていたとき、全国から集まった人々の宿坊として使われていた「教算坊」。(昭和7年佐伯宗義邸となり、没後富山県へ寄付)

山里に生まれたというだけで、仕事も学校も病院にも行けないような不便な生活をしなければならぬなんて、不公平だ！

宗義少年は、祖母の話を通して、自分の生まれた里に誇りをもっていただけに、村の現状がくやしくて、歯がゆくて、仕方がありませんでした。

「よし、大人になったら、おれが何とかしよう。いつか、この芦峯寺を昔の姿に戻したい」

村人の貧しい生活を見るたびに、宗義少年の心には、ふるさとのために何かしたいという熱い思いが次第に育っていきました。

まずは”暮らしの足の整備を

電車やバスなどの交通網が整えば、山里に住む人たちも、町に働きに出られるし、学校や病院にも行けます。人々の暮らしをよくするためには、まず「暮らしの足」が必要だ。

そう考えた宗義さんは、富山電気鉄道（現在の富山地方鉄道）を創設し、交通事業に乗り出しました。ところが、当時の鉄道省（現在の国土交通省）は、宗義さんの考えをなかなか聞き入れてくれませんでした。

「人々の働く場」と「暮らしの場」をつなぐ地方鉄道こそ、地域の人々で作ることが大切なのです。ぜひ認めてください」

宗義の熱い説得で、とつとつ鉄道省からの許可が下り、富山から滑川・魚津に向かって鉄道を敷くことができました。

「鉄道だけではなく、バスも必要だ。バスがあれば、

もっともつと便利になるに違いない」

宗義さんは、自らバス事業にのり出し、県内各地にバス路線も広げていきました。

立山のドテツ腹に穴を開ける

1951(昭和26)年、衝撃的なニュースが富山県を駆けめぐりました。関西電力による、黒部川第四発電所の建設が決定したのです。

長野県側の大町トンネルが完成すれば、人々は、やがて大町を通って立山に登るようになるでしょう。そうになると、もともと立山への玄関口であった芦峯寺は、ますます人々から忘れ去られてしまう。

宗義さんの胸に、幼い頃の思い出がよみがえりました。千年の昔から、立山信仰で繁栄した芦峯寺。霊峰立山を守り、讃えてきたのは、芦峯寺の人々なのです。



宗義さんは、「立山連峰を貫いて、富山県と長野県を結ぶことにより、日本海側と太平洋側の格差をなくし、地方自治を盛り立てたい」と考えていました。





立山ケーブルカーについて調べる立山町立利田小学校6年の
佐伯優太さん、西村剛さん。

子どもの感想

宗義さんは、自分の信念に基づき、何年もかけて、見事に立山にトンネルを通すことができました。さらに、ケーブルカー、ロープウェイ、高原バスなどを乗り継ぎ、子どもから大人まで、どんな人でも立山の自然とふれあい、日帰りで雄山頂上へ登山できるようにしました。

「宗義さんは、日本一強い自分の意志を持っていてるんだ」と感激しました。

「確信を得たことは、実行に移すべし」という宗義さんの強い言葉に、大きな勇氣と最後までやりとげる強い意志を、私はもらいました。

(立山町立利田小学校6年 宝田直美さん)

「立山への交通と観光ルートの整備は、何としてでも、郷土で生まれた自分の手で行わなければ！」

ちょうどそのころ、富山県では、立山一帯の天然資源や電力資源、観光資源を総合的に開発しようという計画が立てられていました。

宗義さんは、県、北陸電力、関西電力と協力して「立山開発鉄道株式会社」を創設し、県境を越えて、地元の発展につくそうとして立山の開発に取り組みました。

さらに「立山黒部貫光株式会社」を創設し、立山の真下を通る立山トンネル、ロープウェイ、地下式ケーブルカーという、3つの大仕事を進めたのです。当初の予算は38億円。宗義さんは、資金集めに駆け回りました。なんとか資金のめどが立ち、いよいよ工事が始まって、問題は山積みでした。

空気が薄い高所での重労働や、冷たい雪解け水が、作業員たちを苦しめたのです。

地盤が弱い破砕帯をどう掘り進めるかというのも、難しい問題でした。破砕帯を掘ると、灰色の粘土の混じった、ドロドロの湧水が一気に噴き出します。さらに掘っていくと、岩盤が崩れ出すのです。

工事現場では何度も何度も調査を重ね、必死に掘り進めるルートを探しました。

強い信念が生んだ

立山黒部アルペンルート

立山にトンネルを掘るための対策会議も、繰り返されました。

「湧水が冷たすぎて、作業が思うようにはかどりま

室堂トンネル（立山トンネル）
の貫通（1967年10月27日）。



黒部ケーブルカー開通式
の日（1969年）。



5 自然とともに生きよう



立山町立利田小学校6年生のお友達が、アルペンルートについて取材に行き、勉強の成果をまとめました。



立山研修会館（旧佐伯宗義邸）で、立山黒部アルペンルートと宗義さんの生き方について宗義さんの秘書をしていた金山相談役から、お話を聞きました。



大観峰と黒部平を結ぶロープウェイ

せん」

「1日かけても、3mほどしか掘れないのに、この破砕帯も突破しなければならぬなんて…」

「工期は大幅に遅れています。資金も底をついてきています。立山にトンネルを掘るなんて、やはり現代の技術では、無理なんだ」

誰もがあきらめかけた中で、宗義さんだけは弱音を吐かず、強い信念をもって語りました。

「資金は、何としても用意する。みんなは、技術面の対策を練ってくれ」

宗義さんの言葉に、技術者たちが奮い立ちました。ボーリングを行って湧水を抜いてみてはどうか。薬剤を注入して、軟弱層を固めてみよう…。

こうした苦勞の末、1969（昭和44）年12月、外

は猛吹雪の立山の下で、トンネルが貫通しました。

1971（昭和46）年には、ワンスパンのロープウェイ、全地下式のケーブルカー、黒四ダム、大町トンネルをつないだ、立山黒部アルペンルートが、全線開通しました。夢物語と思われた「立山黒部アルペンルート」の完成です。

「立山黒部アルペンルート」には、広告の看板など、商業的なものは設置されていません。また、車の乗り入れも制限され、自然や環境を守るための様々な工夫がされているのです。

自分の手で、立山を近代的に開山したい。しかし、霊山である立山の自然を、人間がむやみに侵してはならない。そんな宗義さんの思いが込められているのです。

宗義さんの愛した立山の自然と文化は、今も多くの人々に伝わっていると思います。

ふるさとの宝物、世界の宝物だね。

立山トンネルの完成には、5年の歳月、延べ37万2500人、54億円もかかったんだ。



コラムで紹介した先輩もふくめると、45人のすばらしい挑戦の物語を読んだことになります。あなたは、どのお話が心にのこったでしょうか？